

通し番号	3762
------	------

分類番号	12-34-15-05
------	-------------

「不知火」の収穫時期及び果実の大きさと品質の関係	
[要約] 「不知火」の果実を2月上旬から半月毎に調査したところ、屈折計示度の上昇及び、クエン酸含量の減少のパターンには年次間差が認められないものの、それぞれの数値には年次間差があった。良食味で安定した品質を確保できる果実階級は、Lから3Lであり、特に3Lでは、安定した糖度と低クエン酸を示す傾向にあった。	
農業総合研究所・根府川試験場	連絡先 0465-29-0506

[背景・ねらい]

有望な中晩性カンキツとして、「不知火」、「はるみ」が注目され、全国的に栽培目面積が増加しており、特に、「不知火」は露地、施設のそれぞれで栽培が急増している。そこで本課題では、「不知火」の本県における特性を明かにし、栽培方法を確立させるため、収穫時期及び果実の大きさとその品質の関係について明らかにしようとした。

[成果の内容・特徴]

- 1 昨年度は、1月下旬、本年度は2月上旬からの果実品質を調査したところ、糖度の上昇及び、クエン酸含量の減少のパターンには差が認められないものの、それぞれの数値には年次間差があった。本年度のクエン酸含量が、1.2%程度になる時期が昨年度よりも半月ほど早かった。この数値の差は、2月上旬から見られていることから、2月上旬のクエン酸含量から収穫適期を推定できる可能性が考えられた。
- 2 階級別の果実の大きさは、7月27日時点でS（横径：50mm以上55mm未満）と3L以上（横径：73mm以上）には明確な差があるが、M（横径：55mm以上61mm未満）から2L（横径：67mm以上73mm未満）までは、ほとんど差が見られなかった。果実の肥大は12月まで進むがそれ以降は変化が見られなかった。
- 3 階級別の屈折計示度、クエン酸含量をみると、M以下で高糖度である一方、クエン酸含量も高く、良食味で安定した品質が確保できるのはL（横径：61mm以上67mm未満）から3L以上であり、特に3L以上では、安定した糖度と低クエン酸含量の果実になっている傾向が見られた。

[成果の活用面・留意点]

- 1 収穫時期をより正確に推定するためには、時期別の果実品質のデータをさらに追加する必要がある。
- 2 階級別の肥大及び、摘果基準については、気象条件及び摘果時期を加味する必要があることから、数年間データを蓄積する必要がある。
- 3 ウイルス罹病による果実品質の低下についても考慮する必要がある。

[具体的データ]

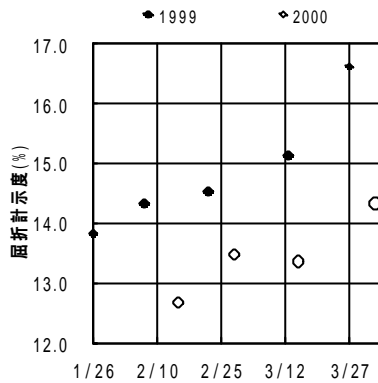


図1 不知火の収穫時期と屈折計示度との関係

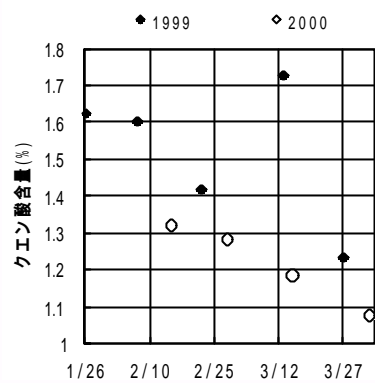


図2 不知火の収穫時期とクエン酸含量との関係

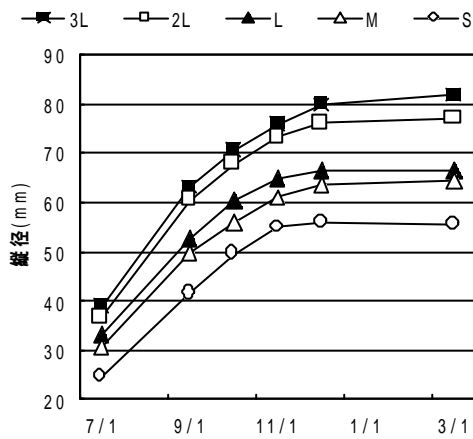


図3 不知火の果実縦径の推移と収穫時果実階級の関係

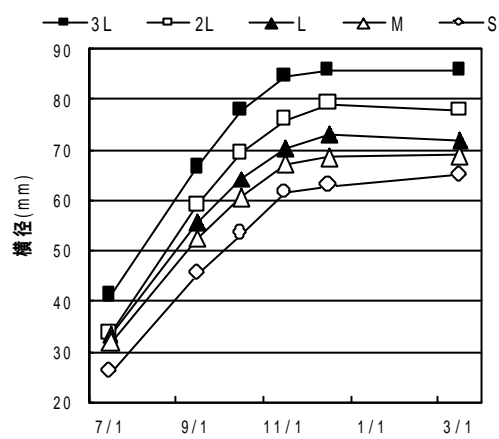


図4 不知火の果実横径の推移と収穫時果実階級の関係

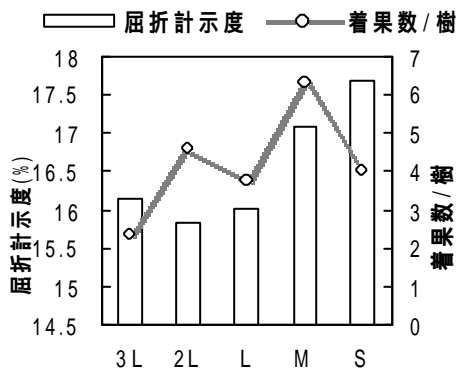


図5 不知火の果実階級毎の屈折計示度と樹当たりの着果数の関係

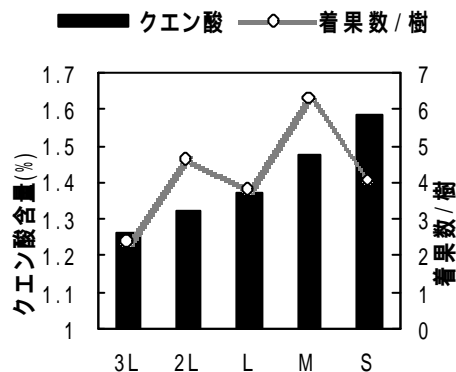


図6 不知火の果実階級毎のクエン酸含量と樹当たりの着果数の関係

[資料名] 平成12年度試験研究成績書(カンキツ・キウイフルーツ)

[研究課題名] 不知火の収穫時期及び果実の大きさと品質の関係

[研究期間] 平成12年度

[研究者担当名] 真子正史、浅田真一、鈴木伸一